博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	清水　徹
論　文　題　目	坪内逍遙における小説論及び作品研究

審査要旨

本論文は、坪内逍遙の出発期の文学論・文学観を再検討し、同時代の文学概念や用語を逍遙が如何に摂取したかを詳しく検証するとともに、そのうえで逍遙の初期の小説の表現の特質を明らかにしようと試みたものである。論文は三部構成で、全十一章、及び序章・終章・主要参照文献・初出一覧からなる。

このうち第一部「日本近代美術論における「妙想」タームの諸相」においては、逍遙の文学論の中核をなす「妙想」という概念について、フェノロサの英文を大森惟中が和訳して出版した『美術真説』における「妙想」訳や、『大日本美術新報』など、同時代の美術論・文学論における用法や位相を詳しく辿っている。まず第一章「『美術真説』における「妙想」訳－フェノロサ草稿演説資料を手がかりに－」では、フェノロサの英文草稿と『美術真説』とを丹念に比較し、従来はフェノロサの「Idea」の訳語としてのみ捉えられていた「妙想」が、実際には「artistic quality」「spirit」などの訳語としても用いられていたことや、漢詩で用いられた東洋美術観の意味、すなわち観者が感じとる感性・悟性に訴えた精神的心情的な「想念」の意味にも変化していることを検証した。また第二章「日本近代美術論における「妙想」－岡倉天心の「妙想」を中心に－」では、日本近代美術論において用いられた「妙想」について考察し、天心の「妙想」には、作者のオリジナルな想念とナショナリズムとしての時代精神という二種類の意味が存在したこと、このうち作者の想念としての「妙想」は「着想」という用語に、時代精神としての「妙想」は「理想」という用語に転移し、天心にあっては明治三十一（一八九八）年以降、鷗外の美術論の影響などもあって、「妙想」という用語自体が使われなくなったことを明らかにした。

続いて、第二部「逍遙小説論におけるタームの問題」においては、こうした「妙想」概念の坪内逍遙における摂取、および同時代の文学者における摂取と流通について確認するとともに、その基底にある逍遙の江戸小説の受容について考察している。第三章「坪内逍遙の小説論における「妙想」概念の位相－「真理」及び「理想」概念との関係を視野に入れて－」では、逍遙の「妙想」概念の変容と，明治二十三（一八九〇）年以降に用いられなくなっていく足跡を追尋しつつ、その背景に森鷗外の批判などによる逍遙の小説観の変化を見出し、小説から戯曲への移行をめぐる従来の理解に新たな視点をつけ加えた点が、高く評価される。また第四章「石橋忍月の文学論における「妙想」－逍遙・鷗外・魯庵・透谷等との比較において－」では、同時代の文学者が説いた「妙想」概念を考察し、その多様性を明らかにするとともに、明治三十八年（一九〇五）年以降、文学界において「妙想」という概念が用いられなくなっていくことや、その衰頽に鷗外の美術論や文学論がかかわっていることを指摘している。こうした明治作家の基底に、江戸小説の受容があったことはいうまでもなく、逍遙の馬琴受容についてもすでに多くの指摘があるが、第五章「坪内逍遙における馬琴小説の受容－読者観をめぐって－」では、『小説神髄』における読者重視の観点が、馬琴小説中で主張されていた所説であることを指摘している点に、新しさがある。さらに第六章「美術としての小説（ノベル）の成立－『小説神髄』における「人情」をてがかりに－」では、逍遙が参照したブリタニカ（第八版）の「ROMANCE」の記述の検討などを通して、『小説神髄』における「人情」が、個人的な感情のみならず、時代変遷にともなう文明社会における観念（精神・感情）をも包含するものであり、明治の功利主義・立身出世主義などの精神をも含めた内容でもあって、このような「人情」観が小説を近代社会における「美術」として位置づける契機となったことを指摘している。

そして、第三部「逍遙小説における趣向・構成・描写法の種々相」においては、第一・二部の考察を踏まえて、『当世書生気質』『妹と背かゞみ』『内地雑居未来之夢』などの逍遙の小説における趣向や構成、描写法等の特質を、馬琴らの江戸の小説と、スコットらの英文小説との双方の関わりを視野に入れながら、明らかにしようとしている。このうち第七章「坪内逍遙の小説にみられる夢の趣向－『当世書生気質』『妹と背かゞみ』を手がかりに－」では、逍遙の小説における夢の趣向が、江戸文学における夢の趣向、すなわち、夢を正夢や吉凶の夢

氏名　清水　徹

判断と考える趣向とは相違し、現実の世界とは隔絶された世界として存在したことを指摘し、ベインらの近代科学の所説をも援用しながら、小説の趣向が試みられていたことを指摘している。また、第八章「『遊学八少年』から『当世書生気質』へ－構成・趣向における『牡丹灯籠』の影響－」においては、『当世書生気質』が構成および内容の両面にわたって、『牡丹灯籠』の影響を受けながら、その人間表象において大きな隔たりがあることを明らかにし、第九章「坪内逍遙『内地雑居未来之夢－中絶の意味するもの－」においては、未来記の体裁をとるこの小説が、実際には執筆当時の社会状況を踏まえて書かれており、はからずも自らが否定する政治小説への接近がこの小説の継続を困難にしたという新しい見解を提示するにいたっている。さらに第十章「坪内逍遙の小説に表象された女性像－『当世書生気質』『妹と背かゞみ』「細君」「巣守の妻」を素材に－」では、これらの作品において逍遙が主軸とした気丈な女性と気弱な男性との恋愛という構図は、江戸人情本などに見られる色街の男女の色恋と明確に異なるものであり、その背景には、当時のいわゆる「自由結婚」と「干渉結婚」の中庸を図るとともに、男性側から見る女性観を変えるべく主導しようとした社会改良小説としての側面があったことを指摘している。そして第十一章「坪内逍遙の小説にみられる描写法－江戸小説と英文小説の描写法を手がかりに－」では、逍遙が強い関心をもっていた馬琴とスコットの小説における人物描写・対物描写・風景描写・心理描写などの特色を詳しく比較検討しつつ、逍遙がそれらをどのように受容して自らの小説の描写を試みたかが、豊富な具体例とともに検証されている。

これらを通して、本論文は、江戸文学と英文学の両方にまたがる逍遙の文学論の立脚点を、同時代の文学・美術概念の詳細な検討などを通して明らかにするとともに、それらが『当世書生気質』をはじめとする初期の小説の試みにどのように反映しているか、またその結果として、それらの初期の小説がいかなる特質を有しているかを、具体的なテクストに即して明らかにしようと試みている点に特色がある。とくに、『小説神髄』における読者論に先見性がみられることの指摘や、逍遙の小説の中に見られる近代性、すなわち江戸文学における趣向とは明確に相違のある趣向を摘出し得た点などは、本論文の収穫と評することができる。

しかし一方、公開審査会では、「妙想」などの用語や概念の位相が、文学論や美術論など比較的狭い範囲でしか辿られておらず、仏典や経典などを含めたさらに広い視野が必要であることや、個々の用語・概念や作品については検討されていても、全体的な位置づけや作品に対する方法論がまだ希薄であり、さらに分析的な論述が求められことなどが指摘された。とくに、用語や概念を問題にしている第一部・二部と、初期小説をとりあげている第三部との接続や展開が必ずしも十分ではなく、今日の読者あるいは逍遙研究を前にして、何を新しさとして提示したいのかをより明確にさせる必要があることは、審査委員の共通した指摘で、今後、本論文をさらに意義あるものとし、単行本として刊行しようとする際の大きな課題であることが、確認された。

坪内逍遙は、いうまでもなく近代文学の成立にきわめて大きな役割を果たしたが、とくに出発期の文学活動や文学観については、まだ検討する課題は数多く残されている。そのような中で本論文は、上記の課題を含みながら、逍遙の文学の立脚点を明らかにするための基礎作業として、その用語や概念を丹念に検証して跡づけ、逍遙の出発期に関わる新しい視点をつけ加え、今後の研究の進展に寄与するものであると判断される。従って審査委員会は、全員一致で、本請求論文が「博士（文学）」の学位授与に値するものと認定した。

公開審査会開催日	2019 年　4 月　24 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	宗像　和重	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋　敏夫	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田　裕一	日本近現代文学	博士（早稲田大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽　耕史	日本近現代文学	博士（早稲田大学）
審査委員	神戸松蔭女子学院大学文学部・教授	青木　稔弥	19 世紀日本文学	